

研究成果展開事業
共創の場形成支援プログラム
(COI-NEXT)

育成型

終了報告書

「地域生産現場のマテリアルイノベーションがつなぐ、
はたらくまなぶミルフィーユ協創拠点」

プロジェクトリーダー	氏名	佐藤 一志
	所属機関	仙台高等専門学校
	部署	総合工学科
	役職	副校長(総務担当)/教授

2022年4月

1. 拠点ビジョンの作り込み

育成型期間の当初から拠点ビジョンは変わっていないものの、そのビジョンを達成するための拠点名称やターゲットの技術オリエンテッドからの脱却について模索した。これまで、拠点ヒアリングを通し、リベラルアーツや「まなび」のあり方の議論や市民参加などに関して多くの示唆をいただき、それを咀嚼しつつ共鳴してもらえそうなところに足を運び、対話を重ねた。その中で、技術オリエンテッドだけでは地域で多様なステークホルダーと包摂的な対話にならないことに気づいた。一方で、参画機関の持つ強みとして「ものづくり」は欠かせないことから、「ものづくりとまなび」に集約し、ビジョンを達成するための地域共創の場として「みやぎものづくりとまなびのラボ」を開設するに至った。

拠点ビジョンで謳った「ミルフィーユ型社会」とは何かについて、参画機関でワークショップを開き、深掘りしてきた。学校教育が終わってから仕事に就くという一方通行の社会の仕組み自体が、産業を知らないまま就職先を決め、結果として大都市圏や名前の知られた企業を選択するという現状の地域課題の根源にあり、学校や社会の壁を破って学び続ける人材をつくるのが地域の産業振興と人材育成には肝であるという認識に達した。

2. 拠点ビジョンからのバックキャストによるターゲット・研究開発課題の見直し

当初のターゲットは「サーキュラーエコノミー視点を取り入れたマルチマテリアル化の社会実装」と「Co-op(就労経験型学修)カリキュラム拡充と社会人入学・学修サービスの実現」であった。この2つのターゲットは、育成型期間中に対話をしてきた様々なステークホルダーにとって、拠点ビジョンからのバックキャストとして必ずしも共有できるものではなかったため、見直しについて議論を進めてきた。誰もが共感できるものとして、「ものづくりとまなびのラボ」の今後のターゲットを「ともにつくる社会」および「ともにまなぶ社会」へと単純化し、そこに至る多様なアプローチを研究開発として進めていくこととした。

3. 運営/研究体制とマネジメントの仕組み構築（持続可能性の具体化含む）

拠点ビジョンを実現する地域共創の場として、「みやぎものづくりとまなびのラボ」を開設した。その設立趣意書を下記に示す。趣意に賛同しビジョンを共有する機関あるいは個人の参画を今後も継続して進めていき、活動を広く進めていく予定である。

みやぎものづくりとまなびのラボ設立趣意書

かつてのものづくりは、作る人と使う人が創意工夫を積み重ねてよりよいものを生み出し、さらには作り手が想定していなかった用途に応用されることで爆発的なイノベーションを人類にもたらし、科学技術社会を形成してきました。

その一方で、産業と教育の分離は、一通りの知識を身に付けてから働くという、一方通行社会への固定化をもたらしました。教育機関は知識の伝達のみを担うことになり、若者は、文系・理系なる選択を迫られるばかりか、身近な地域で経験できるものづくりの魅力に接する機会を失っています。そして、地域社会は人を誨（おし）える機会なく、まち・ひと・しごとの一貫した活力を失いつつあります。

また、はたらくこととまなぶことの断絶は、ものづくりの本来の魅力である創意工夫に内在する真のまなびの機会を失わせています。このことが、若者に限らずこれからはたらこうとする人、現在のはたらいっている人にも、新たな社会を切り拓くための創造性の貧困化をもた

らしているのではないでしょうか。

ここに、このような危機感を共有する機関が集い、地域生産現場発イノベーション共創を基軸とした「はたらく」と「まなぶ」のミルフィーユ型社会の実現をビジョンとして、みやぎものづくりとまなびのラボを設立します。ここでは、学びて厭わず、人を誨えて倦まずの志を同じくする人たちを募り、交流から作り手が想定していない応用が生まれることを期待しています。そして、産業分野・学問分野に囚われず広く世に活動を拡げ、自然豊かな地方の創生にもものづくり文化の復興で寄与します。

さらに、この活動を通じて、多様な一人ひとりの尊厳を尊重し、さまざまな違いを個性として認め合うところから創造的なイノベーションが生まれると信じ、そうした社会環境の実現に貢献します。

4. 研究開発課題の成果

ビジョンからのバックキャストによる産学官共創による研究開発はスタートしたばかりで成果はまだこれからであるが、当拠点では成功事例だけでなくトライ&エラーを重視し奨励したいと考えている。ビジョンを共有してから研究開発を進めることにより、研究開発途中で何らかの理由で社会実装が難しいと判断してもビジョンに立ち返り軌道修正して、新たなアイデアを持ち寄るなど、柔軟な共同研究開発を進められるようになっている。これまでの産学の共同研究の形態とは実感として全く異なっており、今後もこのような形態の研究開発を広げていく予定である。

5. 今後の活動について

従来型の学校の在り方を、この拠点の活動によって段階的に変革していきたい、と考えている。教員・学生および地域のマインドを変えるのがこの活動の目的の一つと捉えており、この産学官共創システム自体を高専の教育研究活動の中心に据え、地域を出発点に日本全体に広げていけば、強靱な教育・産業が生まれ、ものづくり産業にもイノベーションが起これ、真にまなぶ人が大学等に集まり日本全体が大きくルネサンス（復興）を迎えるはずであると考え。みやぎからスタートしてみちのくに広がって、ラボではなく、人のつながりであるウェブとなって「ものづくりとまなびのウェブ」(m3web)を到達目標として、この拠点も必要のない社会となっているところが最終形態と考えている。

最後に、地域に限らず、現状の学校システムに馴染むことができず不登校などでまなびを止めざるを得ない子どもたちが、その後社会で活躍する機会を多々失っていることに危機感を感じている。そのような子どもたちから現状のシステムを打破するイノベーターを見つけ出すことも行いたい。拠点ビジョンの実現が社会全体の持続可能性を高めるものと信じている。